湘莊小録

二

特別
14
1919
84

門イ4 1919 6
門イ5 1380 6
昭和十六年十月三日寄贈
本島謙吉氏

○青磁

◎種類と鑒識

青磁の唐物と称して舶来したる古名品と称し、各種類を列挙して説明するものも、務めまたべきことあるべし。青磁を一堂の内にて火炉の上令なる品物と異なり、清淡愛玩すべき砧手以上のものを、天龍寺手以下のものとを、其品位精粗区別あらんも、天龍寺七官の二種を極めて識別し難く、天龍寺の下手なるもの

七官の位なるべし、七官の上手は天龍寺のぬきあるべし、又何
手何手と称するも、天龍寺の七官の三種混入と
なるべし、かゝる一手をもて立てる一種のものなり
判定すべきなり、是等を能く其現ずるを以て鑒識
の上定むるなり非ずんば、第一の能く進むべきあるべし、
既に七人の鑑定せしものと雖も、往々第五のお弟子
のあるべんなり、況んや現ずるを待れて、元
少なきを以て、鑑定の難きこと尤甚し、又
青磁の諸手の名称を形容せしもの
かるべし、其種類は、
かるべし、是れ〳〵の等、直ちに支那の某窯のものと論
ずるは、能き事なり、和尚寺産を名づくべし

かるべし、之れを支つべしと雖も、一七種を
比較あるべし、又其種類の何手と称するも、世宮の
参人、或は茶碗、其他、所もし名称して其種
呼泥盤一七の名称なるべし、若し、祖顔竹
の節等を形式を模倣して福禄手、宋社丹手、八
角手の如きを、拵拵を以て日の如き、珠光の不昏成
を以て名づけし、七宮の船齋もし人の名を以てするが
一定のことなし、然れども最も人の名を以てするが
て名づけるべし、却て拵模を生じ、人として結
迷いしるべきなり、かゝる状態を
を説て之れの説をなさんとす

◎釉色

釉色に二種のあり、唐代の宋代の窯を尊ぶの青天を呈するもの、秘色色をなすもの、越州窯、柴窯、吳越秘色窯、官窯等即是なり、宋末の窯八蒼緑にして青竹色を現ず、哥窯次下のものなり是なり、窯し砒、天龍寺の已和も是を今を大抵を深ふし、清の朱琰う著す陶說官窯の條の後を曰く、色彩青を以て上とす、淡白之に次ぐ油灰色を色の下なりと云、彩青とは即ち砒青釉のものを云い、淡白色とは青釉中の淡白を言いなり油灰色を

青綠を鼠色を言い、稍黃綠を含むものなり其他、紅或を黃色を言うあるも、例の如く一窯の中にても其色の一様なるを火度の工合によりて変色を生ずるを釉の薄きこの故に地質の顯るも、火変りと呼ぶものなり、茶家流を此中の火変り、斑点現れたるものを、殊のお賞玩すと雖、青綠の本来色へは出来の下位なるものなり、又釉色の溶潤、玉のやきものと、殆間色を欠くものなり鈍色なるものあり、是又釉料う、火度溶解の工合よりものの一種釉の原料に粘土のおあるものの二種あるし、後来茶家流の喜む所を尚し、しかみのあ

うるおいを帯び、光沢のある、鮮美なるものを好まれましたが、猶潤沢を生ずる為に二芽茶を用て賞玩する、殊に青磁の上なる優劣を論ずるときは、必ず溶融無きかを貴び、優劣なし、猶ほ光沢の乏しきものを次とす、鈍色なるものは論ずるに足らず、殊に鈍色の内に一抹の赤班すべからざるものあるは是れを青磁の土中の埋没し数年の後に掘り出せば、其抹殺せられざる点、全く釉色に因て鈍色を帯び光沢なし、是れ久しく土中の湿気に侵されて其本色を失したるに因てなり、加之此茶の器を試るに、再び室中に入れ五年の久候を過ぎしめば、必ず光沢の

東京博覧会

未だ嘗て回復せざるものなし、現今之れを試験し、一切人の設ける所にして、其抹殺せられざる鈍色なるものを初めとして、其抹殺せられざるものを以て、三種の区別あり、釉料の軟弱なるもの、若抹殺の内なる其釉の剥落したるもの、猶ほ土味を現ずるもの、猶ほ青磁を釉料に使用するもの、之を堅硬なるもの、容易に剥落するものあり、又磁釉色の異状なるものあり、鑑手と称する是れ又火色の美なるもの、茶褐色を為すもの、一見青磁と見るべきものあり、茶褐色を為すもの、一見青磁と見るべきものあり、俗に赤青磁と称す

市岡侍郎所陳列品中に一個の釉色悪しき淡褐色

現今京都南禅寺の什物に大香爐あり其色極めて濃く恰も澁き柿の柿蔕の如し又世にいふ人形手の茶碗に此手多くあり淡褐色にて黄澁とも謂ふべきものあり彩色の如く火変のものも濃淡一様ならざるもの多しと知るべし

○貫乳

凡て陶器の貫乳即ち氷裂なるものは元来釉薬と土坏とは同一の伸縮をなさず土坏は釉薬よりも冷気に逢ひ縮むこと速かなれば必ず氷裂を生ずるなり又青磁に限らず総てひゞ焼の陶器を焼くには窯の中より早く出して急に室外の空気中に置き又は団扇を用ひ煽ぎ冷して氷裂を生ずべし此理は元来器坏も釉薬よりも組織粗なるが故に釉薬先づ坏の肌に緻密に漸く熱を散せんとするに坏器既に冷却して縮むるが故に釉薬自から氷裂を生ずるものなり然るに青磁の釉料は極めて緻密にして高度の火力に逢ひざれば溶解せず通常染付の如き流れ易からず故に土質の緻密なるものを選ばざれば均しきものゝ不揃なるものなれど多くは氷裂あるを免れず故に氷裂のなきものは又土質の異なる原因を撰まざれば見るべし

◎土器

土器を三種計の別あり、表は外面を鎖の如く眼を似て塗おるものもあり、茶を入れて紀元前後固結するとす、然れども磁器を破壊して取ることを甚だ難とす、既ばを以て能くこれおるることを、鼠色と黄白色と朱土のものとあり、又其内に数の結果のあるもの、是等の土器は貝殻の多くは坏器の底、又は是等の土貝を鉄鏃色を現出するを常とす、是を支那の紫貝鉄色と云ふ色の落きるものを紫と云ひ、落きるものを紅と云ふ、是れ貝土鉄氣を含みたるを以て

必ず此色を出すなり、本邦青砥を模造したる黄土の塗土を為すも亦是なり、而して此紫と云ひ紅と云ひ落色の多あるものを、室中火を焚くの二合したるに関係することを多しとす

◎班紋

青銅器面、釉色の内に班紋を現ずるものあり、又貫氣を取りて紋を為すものあり、陶説官窯の條に云ふ、鮮血紋を上とす、指紋片墨紋之次ぐ、細碎紋は紋の下とす、此鮮血紋とは澄血班点を散布するものにして、中色硃砂の精光を帯びたるものの事四博物館の看

る鮮血紋青磁を即ち官窯の特徴とする。梅花片
星紋を本邦所謂形花青磁にして、梅花片大の星紋を
を現する斑点を示す、此手は梅花片の間を示、小は朱粧
る大きを容す面に印せるもの、細碎紋は貫
乳の極細微なるもの、完然漆器の断紋の如
き面を現ずれども、但し多列の粗大なるものを、之れを
取る、最下品なるもの、蟹爪紋は蟹爪の肌あ
る斑点を以て沫泡の如きものを為して全面をポツ
くと散布せる、魚子紋は粒々の間をムラ〳〵と
勝のぬきものなるを為す、是等の釉紋を、皆青磁
器中に付する所なるべし

模様

模様を、牡丹芍薬等の花を、蓮花
畫花、繍花、印花の四種あるも、此四花等の花の中
は、花の形を、模様の如くして、凸花とは本邦古謂
類斑手、研屏手の如き、畫花を沈牡丹手の
類を、繍花を深牡丹手の類を、印花を人形
手の類を、而して蟹爪紋を為して、土坏（ヒヂ）（生地）の表
面又は木條を以て模様を彫き出しなるも
を凸花とし、模様を立て刻しなるを畫花と
模様を彫く深き出し唐俗（カラ）をつくるが如きを繍花
と、模様を木印を用ひて押形を附し作る

を印花ありて、又一種、仕様の厚く、雙魚の浮彫を浮出しにせし物の如き、土質を現し、釉を施さゞるもの又ときに釉を施し少くとも陶器龍泉窯の條に無き雙魚あるを云へば即ち是なり

◎青磁の品類

古青磁の種類を大略左の四種とす

一 上代青磁（本手青磁）

二 禮青磁

三 天龍寺青磁

四 七官青磁

附

一 均窯青磁　一 福州青磁　一 京張青磁

一 上代青磁　一 本手青磁

抑そもそも上代青磁、本手青磁の名称を中古未だ之れを称せず、近来の学者が祖手の内其品格を区別し、之れを祖述、繹尋し、萬葉を考、銘器秘録を尋ねつゝ、之れを著すに未だ此名目を挙げざれば則ち学者以等の称呼なきを而して是れ唐代秘色の言を指して云へるなり、又抑そもそも上代を本手の別名とし名言曰おく、其名なるの故なり、故に之れを紀す義、本邦之れを伝聞すること、そもそも代世

東京博覧会

七十くらいて六、七十年を経て、源氏物語を初めて世に出す。紫式部（紫の色）又は紫の上（青磁）と称する所以なり。源氏物語の出るまでは、いそくやうのもろこしの、その頃書籍の印刷、天暦四年、月の光の像に瓶紙色（ビンシイロ）と云へる、宇治保昌に、いそくのつぎ云々、又枕草紙に、あをいのうえ、口おそく、宇治拾遺に、あをいのさうし、こくはをもて、さいけなる、又あをいの瓶に、酒をいれて、あをきうすやうにて、口をつゝみなる云々、青磁の名、是なり。紫式部、枕草子の作者、常用の文にて、青磁の色、物のべくもあるべし、紙の心しく其七十年の後、今日現今にてこそ、

つて稿也。定法寺の傳、又は高野の御物語、茶壺の事、茶道の、茶壺の、一種の名物にして、土質の朱土、浮世物語の、寺傳の、詳なること、寺傳の、物語の、高野の、聖徳法王、宋文、唐代の、隋唐の、物語の、唐代の、北條氏の、手書、唐代の、紙色、本邦の、唐代書籍、唐代の、宋代の、元代の、元代の、元保、唐の、隋の、何稿、

初の六朝より起りしものゝうち、唐ゝゝゝ千年、四年色、後周ゝゝゝ兩ゝ天青、美城ゝゝゝ秘色ゝゝゝ唐の越州窯と吳越秘色の始初なり、宋元高麗の者、皆ゝ備へくん、唐の之を用ゆることを後ゝゝん、於ゝ秘色の名ゝゝ、後周の柴窯を柴世宗の時の開きゝゝゝ、宋代に高麗の瓷式を世宗ゝゝ、いしゝゝ其ゝ此を秘しゝゝ兩過天青雲破月來、者般顏色為將來の作ゝゝ、兩ゝ天青の稱ゝ是ゝゝ、其釉色のまきこと、天のゝゝゝゝゝゝ後のゝゝ、薄きこと紙のゝゝ聲、殼のゝしと、又土胎紅と云ふ、柴窯、宋も稱ゝ人、ゝ後片ゝゝも高麗

玉と等ゝ、時代ゝゝゝ、後ゝ完器ゝゝゝ、紙ゝゝゝ方ゝゝゝ稱ゝの瓷器ゝゝゝ推ゝゝゝし

◎砧青磁

是ゝ唐の高代のゝゝゝゝ、本ゝ青磁ゝ稱ゝゝゝゝゝ、此ゝゝ其形式精巧優雅ゝゝ釉色難能滋潤多し、色淡青、兩ゝ天青の稱、形容しゝゝゝゝ、蓋し砧の砧杵ゝゝ其初ゝ千利休、不折の花瓶大ゝゝ作者故ゝゝ鐵ゝゝ、利休自ゝ鐵ゝゝゝゝゝゝ謎ゝゝ、斯ゝ呼び称ゝゝゝゝゝ、又拙記（山科首席あり、秘乎秘乎、同係ゝゝ記ゝゝ）此青磁の花瓶を有ゝゝ

砧千の弟子

勝れたるものなり是れ天獻院殿の時代の後西院
を祈り地蔵菩薩（延寿院）を建立せられたるなり、後西院の勅名
なる千聲と稱せらる、持月十聲入意の古作よ
り砧の音を少も劣るなり又一説に中堂の鐘が
花瓶の形狀砧樣しに似たるを鑄たるなりしも
へるも、銘文夜明の文字高彫の砧同手のものを列記して
花瓶なりと鳳凰堂、鐘年、雲形、往間、筍形
等の花品類にて、香爐、燈、皿、水を載てるも、後
世を基準の品も同色金のものを依物して砧手とす、
之れ名の文つる宋代の名窯の瑪瑙を粉碎して釉と為し、その色淡青にして微う

東京博覧会

ル艶ありて文色多く、官窯は政和年間宋
窯にて、南海の名を傳る政和窯の遺製を新たに
なるも又内窯も亦政和窯の遺製を新たに
なるも内窯は土質細潤、青色微紅
色を呈し、官窯は鱗爪紋ありて土質粗
ともなる

⑦ 天龍寺青磁

元是れ京都嵯峨天龍寺を建てる大元祖
と雲作なるも一説に山雲国の説を記録せり
人なれば天龍船を作せしものなれ後世

同手のものを天龍寺手と称し、瑞泉寺・長寺の什器
にも又此手のものあり、釉色黄緑にして滋潤鮮
艶なるものあり、総して此種を劃花、縞花の類
多くして稀なるものなり、其多数、砧
の釉色と云へる精製にして土質も繁色
を現ずる、瓷質厚くして一見粗くして下作に
見る、七官手の此類にも同様なる七官古渡
と称せらるゝ一夏瓶を具するものあり、此
之を称するものと称する瓶と称する瓶
銘に云ふ、花瓶なりとも環耳、中蓋、十三絃等
等其他耳付壺炉類、鉢皿等、大小共に稀なり

東京博覧会

此外にも多く後年の作にして八郎手の類に似
たるものあり、之の之に次ぎ、支那宣窯を宋元時代の哥
窯、龍泉窯なり、此二窯は、處物に之を陶工
之の名を三年生一、第三年生二と云ふ、各其一窯を
哥窯、之の陶するものを可窯、第の陶するものを龍泉
窯と云ふ、二窯の釉色名称
物の後なり、龍泉窯を哥窯の釉色と
双色の地紋を印するものあり、又一種色を
寺手と称するもの、是等諸窯を天龍
寺手と称するもの

⑦七官青磁

本邦に現存する青磁の内、文物多きものを七官手

とす此れ始めて茅七の位階を受けの御船を初め
て渡宋せしを以て渡宋呼ばるる事、螺鈿の漆器を
又七宝の物あれども日宋貿易せしものなるべし其
品位を高麗中国に比するのおもしろ高麗は
応永年号足利義満の時代なり此の使の来朝
し此渡宋せしものなり中国を天文文祿の比後
四世の南氏等なるべし、倭寇を防ぐ為、錦と外国を
貿易せしを以て宋元時代又後世
八(倭寇の所為なり)延享四年の比船来せしものを
指すなり是は日本の学者文房雅致の哥堂龍
泉堂の條に哥堂、元末新焼なるに、土俗兼煙にて

色又暗くなり、龍泉の堂の時和を存在するもの土壁
火候深く前に及ぶと、又去州堂の條に、今世俗
去州堂を以て、哥堂と称するものあると雖、
哥堂、貴なるの奉と偽位なると、董堂の條に、
貴堂として細潤を欠く、宋堂に及ばざること
しと是考時宋堂の時和のものを指青磁堂
の称なるものにして、其時代のものにあらざる
ことを云へども、さて哥堂、龍泉堂の内にも宋
器と時器の別あるべし、北方の天龍寺七宝の器
は宋元時代のものは宋元時の又
あるを知るべきなり弾ずるに七宝古渡のものを稱

祥の器混入して其の窯たるや孤人ど亡羊の歎あり
必ず従来の鉄宝泉を釉色形青ならしめを砕し
緑色なるを天龍寺と言ひ、七分を陶七分を移せり
然して宋代官窯、哥窯等の内も釉色形青、
淡白、灰色のものあるを知る故に宋窯の器は
色合の下品なるなり。陶七分の移を無み、其杜撰
なること言ふべし。又七分中混入なるを指之
ものを為すことを恐れ土質質色を学ひ
白土にて釉色は淡緑色なるを多くは
體質なるべし下品なる庶の土又なる弱質の鉄色
を撥しなる原始なるを宋器なりと為すを
東京博覧会

掩ひ拭を施すの計を尚めなること、七分移りを為の二
移なる所の灰土質、石の土のみにて仰なるなり
釉色淡緑にて青磁を弱なる石質の
部にて之を撥立すん灰青磁の保を有せざる
なるべし。後にて青磁を元末に於て改る表徴
し時代なるものとなる更に見るべきなるし、陶器
永乗窯の傳なるものの時代なるを知る
祐窯等純なるを絶命なる白磁器を造るなり是
を以て七分の時代と新時代の貴ものを造ること
なるべし

◎拘窯青磁

均窯は生安如、行の代に係るものなれども、之れを詳
にせずと雖、本邦に舶来して久しき唐宋元明の時代
以来の朱青瓷、陳元贈、陰元等の後来るを傳へ
元代のものなるべき、並に人は唐代瓷器なりとするを
絶つて久しく所謂青磁なるものを
と一般に思惟するを以て青瓷と云ふ緑色のものなり
るものなり、此均窯青磁こそ唐瓷色の俤を存し
たるものなるべし、而して磁器の釉を施さ
の立彩燦爛、成化窯の青華白磁才の如き作なり
して青磁の上なる又此窯の現出をまつて初めて
清初に至り此窯衰亡し代を及ぼさること

遠く隔たる瓷器の俤は全く消滅し、均
陶法均州窯の候に、珠砂紅、葱翠青、の二種を記す
紅色は葱翠の如き青色を葱の如しと又おれ錯
錯雜のものあるも、其色純なれども、
天色、さる間青色、珠砂紅色、
出するものとす

◎福州青磁、南京青磁

福州青磁は俗に北中青磁と称し呼称せ
るは来清初の事にして北方、文政天保の作なり
多く舶来せしものなり、和名抄に七宝中に記す、仮て土器
相なる屬として染付美濃と同質のものを用ひ磁土

を撰ひしを絵くて色し、又一種青磁ありて即ち
黄色をみしむる透明の釉料を施し焼る陶器なり
土質を極細に作り彫物軟かく比手も猫の毛の如き
四方香炉又は八角の八卦炉あり、印も模型を押
出し物もしくは自然を節しきあり、南京
青磁と作り器として南青と称す釉色白濁
淡斑あり、極めて巧みに施し淡青磁色なり土質
善良の産出す異なり形高雅に彩文白釉施
すを名づけて雲鶴と称す其白釉を施し焼出る
年号の文字を記せしものあり又一種朱泥の粗土を
以て作りし花瓶あり是は陶器古き

東京橋倉製

もの多く明代のものなれば、抜して茲に係記す

◎高麗青磁

高麗青磁を格古要論に云へる龍
泉窯なりと云へるも我邦にて古書の内にも
精作にして唐物なりと称せり今下
条に説くべきも其特色を知て置べき
○堆朱 是も古代朱朝鮮に於て貴人の古墳
中より掘出せしなれども上古の物にあらず、平調辰
岡三韓時代のものなり、まるで陶器にて
外に朱の釉薬あり、土質堅く陶器に似て
軸軸 純粋の黄色 淡き、美形古

朴ならず古墳時代の陶器を同行のみ

○高麗上代青磁　是れも又古墳発掘物にて

支那上代青磁の方より多く出でたれども其色彩

青緑色と褐色もあれども潤沢を欠き鈍色

を帯びたるものにて上中に在りてもう其数画花の

文も精巧なる物多く優雅なる其土質

を鑑て純粋朝鮮土器なること判知すべし　現今市

廛場物館に陳列する古高麗瓶形、并に新形の水注

あり是等を高麗上代青磁の模範として参考に

供せんのみ

○雲形青磁　物形なる雲形の上に花鳥を画

東京製

芋径との後段あるにて画花印花の器にて多くは

物形の上に細条の如く白釉を施して後青磁釉

を施したるを通例とす　其

色合青磁なるものを上とし鼠色又は灰色のも

のを次とす　土質は鼠色の白土と朱泥土との二種

あるも白土のものは薄手にして精作なり朱泥土のも

は厚手にして下作なり　総して雲形手は釉色

も物形の程良なるに反し花鳥手は釉色

の物形なるに反し花鳥現せるも又おのれ地手

出来なるを稀とす　茶碗、鉢、壺、花瓶等文も多

一珠光青磁　此茶碗ハ宗珠光ノ所持ニ成シ故ニ珠光ト名付ケタル歟　珠光ハ足利義政公ノ茶道ノ名人ニテ侍ル　其代ノ茶碗ハ宋ヤリシ　ナルベシ　大和ノ平蜘蛛ノ釜ト共ニ天下ノ名器ト称ス　此茶碗ハ形ハ俗ニ猫掻手ト称ス　釉色ハ青緑色ニテ極テ美ク溶解シタル釉ナリ　此ノ釉ハ高台ニ及ヒ　無ク　ヲシ　又一種極メテ高台ニ及ヒ　ナルモノアリ　土質ハ白色ニ黒点ノ混シタル細ハ陶器ニ作ル　手ニテ高台ニ及ヒ　ナル歟ノ出来ル　此手ハ高麗ノ作ニ似タリ

一新古青磁　此ハ時代ハ新シクシテ　形ハ劃花ヲ掻キ　歟ハ　特ニ丹唐ノ物ノ模倣スル釉物ハ緑青色ノ極淡キ　ヲ施ス　素地ハ白土朱泥ノ二種ニ成リ　土質ハ　ヨリ白土ニ成リ　此手ハ酒ニ五ツ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　花瓶ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ　ヲ

四　初期焼

宋ノ時代ノ名物ノ法ヲ多シ　今之ヲ列挙シテ其係来リ　作癖ヲ詳説スベシ

○千鳥手　千鳥ノ手炉ヲ之ヲ東砧青磁ヲ倣ク

元文延和義母式部加賀川堤を通ひ北条炉を納にして中
書の節手をるの雨を帰けん反抜て先を千鳥
と称せしとぞ、又拾紀之千鳥を取ひきて乃
毛を抜て名書を備けば多くまうをと吟ずと云ひ又一
説ずるを手新刀出来ずして海き沈みて多鳥の
名を絞せしも又之を書き加えるも云ひ詩続紛々として
今其真を知ずゆるし先こ角みれの言うして名門
五右衛門の望之しと云ひるを是ずを北条を抜仮
ずるをめて彼の名会をあるをも千鳥手を移して
中を賞玩せるとうるくあると
○本口言　是丸作本手に言の脱ずるべし延して本

東京泉水原製

手青砥と甘之しきをうを乞ず茶上の名流を女芸流
手の異気あるをのを始み名抜の手燈を北手をき方
ひ迫真気ずるを名づけし抜へるぐし生新を
事をを恰抜をを前勅刀敵を真直ず胴中
又を上下を二つの沈筋あるを生を体新を三を
ずず
○腰節　本口言同手にして出来之合のし方を
胴中に三石針、二筋充の沈筋ある
○桶手　北手を天龍寺要青砥を多し七変手
ひを未以名新、新を立体ひて恰抜をを掃の如し
迫を鎖新をを手言の生来ず

○朝顔手　端反りて朝顔の花形を有す多くは腰
迄腰の所にぎりの曲き節あり、此手も七支古法
のごとし

○一重口　口作り高き事も古けれど伸び悦好の度
作り桶の如くにして小形なり迄高合る大きく胴も
節多く現れたれども、又一重口提迄なるものあり度
作りも矢張此手なれど、天龍寺等あれども弾
七支古法のごとし

○八卦手　口作り外側に多くなるに胴に八卦
算木の浮彫あり、丸形の提迄にして、底も輪底
出度の二種あり、番帖の形大小あり、此手も天龍

東京藤原製

寺の蒼緑色のごとき多し

○竹の節　腰より竹の節の如き節あり、口迄肩の形
八一定なれども、此手も天龍寺も共
に七支古法のごとし

○沈彫　肩口大形にして胴に三本の沈彫あり迄
も陰形なれども大なるも恰も上張なるの如
此手も本口家同手のごとくして七支法の不多し
す

○白磁手　千鳥手と称して必ずしも銘名稅銘云
ふも白し貫氣多く肩迄の色形の無味なる花
迄千鳥又は竹の節なると雲一紫口織迄

の廣さと嘴と迄の長さを云ふなれつけなる
称呼なるべし

○名地手　形ち竹の節に似て節ごとに肩口
迄ともに帯の如く一輪廻の溝紋ありと恰
も能く形ち作りたるなれ手と名づくるなるべ
名地の手なるべし雷炉に似たるなれ茶碗
絶て奈良朝頃流行の名地手と称するものなり砧、
天祐香上手のなき、潤深玉のなき、美なるを賞
玩せずして却て古代の支那猪沈丸色に濃く
紫色なるを迎み自然素朴の趣味あ
るものを小官つ取るなるべしなる

なる所の利休の雲脚、蓋物の翔鶴なる名称なる
地手なるべし

○袴腰　鼎形の香炉なれ胴の後方の一後方を
袴を穿たるなるべきなれ名づけし称なる
り地手なる砧、天祐寺、七宝中洲、福州寺の作品
なるべ砧、天祐寺の品なる根岸鶴仙山東方
○ギリ手　地手なる縁なる迫陸なる胴中なる螺旋
状の蓋廻なるなるなる二筋なるなるギリの節細
なるなる、肩口の作品長年なる一節高なるは、却て
貴なる出来好し、で先古渡の不手
地一なる高なる古袴腰なる、文なる義なる手ア

[illegible]載せ[illegible]青磁の事を付し
説的文化深切なる[illegible]まで[illegible]解の
しかるに[illegible]を[illegible]
を掲げたること[illegible]青写[illegible]

○東京の風

東京の風雪の雨を付て[illegible]の観察を加へ
に掲載せしゆ伊勢湾附近の[illegible]を[illegible]
東京の風を[illegible]一層の研究
セしを見る即ち[illegible]風の北国を[illegible]
力を知るべし

風を江戸及東京に[illegible]風化の信大なる所
父子[illegible]都府を之に[illegible]の相本の改を行ひ風
八之に[illegible]一般の物を[illegible]
因て生ず地の及ぶ所[illegible]
格と性情[illegible]物徴を[illegible]
東京市と風の関係を[illegible]研究の便位を[illegible]
[illegible]の[illegible]風の地図を[illegible]
地図の示すがごとく日本本洲の位置を関東平原
に較べ北に低きを東向の針路を取て関東
平原を[illegible]曲して針路を[illegible]向はし
めんと関東平原を[illegible]日本の[illegible]

空気と西日本の温暖なる空気と交換する集點
なる、加之南方の洋海は黒潮（暖潮）の流域にあ
りて多量の温暖なる水蒸気を含み之れ地球
の脊梁山脈を越ゆる気流に伴なる水蒸気
寒冷の雨雪を送る而して黒潮と親潮（寒潮）
と衝突する集点は北緯四十度を遠ざかる洋
中なれども、関東平野を含む冬季の気象上の要
素なり今仮作用をなす中心点なる地の気象の変
化を急なるも風を支配する力強き原因なり
故知る可き関東の気象を観察するも而して
其気象知る可き関東平野を含むものなる事を

東京都立図書館

リ

風を支配する事多き等制風を云ふ、北の寒制風を云ふ
時を云ふ視察民を吐吸し煽起して暴横を為
さしむ、凡そ暴横を為すもの多し而して
有史以前地盤を堅め市街田の耶を教ふ起
すること能はざる地の暴横に抗する外なきなり此
点に於ては風を強く政治家なりと謂へさる
を得ず
若布を又東京の風の結果なり宮子の風と火災の
結果なりと今日主義なりと云ふ義を云ふ

えつを立候ちんとし先つ四つ
風を五月のあめ雨を降る五月の雨を降る降る又曰く五
雨を降の降る五月の雨を降る降る又曰く五
都の花を散る散る（能動的）五月の花を散らす
（所動的）此二説共西方義氣上の善惡を表
白すると共に併せて其風俗上の善惡を先示
一つ考る自然の行樂の時期として日本人に
照へ合る梅花の寒さに耐て風雪を凌ぎ
梅の花を咲かせ大地を強奪せんとする雨を
都方を洗流す物質に保守的感化を與へんこと
を試みるを以て新を好む風を雨雲を駆逐し

一所に停住せしめず、雨脚を変化して都府の上
を過ぎ過ぎて、さんざん雨の辛苦を與へ行く
保守的感化即ち屋宇塀壁の間に含みたる微
細の植物種子を落し都府を
養育する風雨を隙を指揮して暗に破壊
しかしめ樹木を電線として一府を雨の徒
労を事無きしめを止むる試みに興味ある比較
例を挙げしめん、京都の婦人を赤子の泣くを向て
「泣かいでもいいかあ」と言、また子の多人を懐き
くつてもいいちやろいか」と言、家内を於て涙

八悲哀の表情化するも亦たる悲しみの表情
作用と認識せらるゝ、京都は雨の都り悲哀の都也
東京は風の都り怒りの都なり
風の保守的感化を排撃するに対し雨は進歩的
運動を決して非難すべきものあるも一面に
於ては進歩的現象なるも不得多日主義にて較々非難
交互の現象を避くるの者は即ち多数主義を主
張するものなり
故に風と雨との故に都市を組織する人の物質
的あるを全くする永く保障す多日主義は
清し現在を以て満足するものなり而
して此都市生活する市民は変化を要求する
現在を、現在の各接を通じて、四周の事物の変化
に対して自己の境遇を新たにすることを以
て自己の其心理的作用は現在的影響を受け
志大の計画を高ん恒久の志操を失ひて従随する
ものなる言義の下に其霊性を銷磨しつゝ
あるに反し雨風を主とする市民は
感化力偉大なる師父たるべき其教神者たるべき
代希臘の哲学の教唆したる懐疑派の哲学
と試みて要素を産れ人類を獨善の生活を
学ぶべき各自性を極度に発揮せしめ自

世界の事物、変化、又は理性の関係を
何れ確知の真理なるべきことなるべし。余
は東京市民の標準を現花流或流と流と
名附くべし、懐物流を古代の市風に於ける現
在流と現花流を分るの事実に於ける懐物流
なるべし
中国を風俗紀氏なる物なること音信雑き
ものなれども東京市民のなる義を知るを知る著
者の説の如し
著者志美術家なれども東京の風を論じて曰く
歴史上みられるべき武者なる風を一面に

東京博文館製

於て暴虐なる政治家なると共に他の一面に於ては
其主因なる於て物理の粉飾を無なる美術家に
なる其一方に於て塵埃を持いて起つや錦の如き花
の如き京を一変して悲惨なる灰色の大都
なるものなり其なるなる不色のあるの
敵なるなる廟陳に一点く微細なる変化を填充し
行くを以て見るなる土なる国民の色美の正し點
決なる灰色をかの味をなるなり
かく京都人の其行動なる風光と同和せる無邪
俗価を貴重なるなる東京人に無者なる異
は所謂なる程々の浪彩の風(灰色)を加味しなる染

色を嗜好する風を美術家が巷説で如何料を以て
発揮しうる美術を東京市民の趣味を教育して
其嗜好を著しき特殊の進化を無ん、只文射として
東京市民を色を於て「鼠」を嗜好し、趣味を於て「洗い」
い」とこれを嗜好するものも、「洗い」とこれを動作
の上に表現する鼠色を含める程
のインスピレーションを与へ而趣味の形態を
明瞭し得ると自から信ずる所謂「通」なる男女が
ポット出の田舎者と同視されんことを痛く恐るる
鼠を加味しなる浜形の文様を選ひて自ら洗かる
時を誤なく、洗つと移りも東京人(しきたりを固執
の清楚なる鼠色の袷衣を着けたる
木綿の浴衣を纏ひて先日一つの現象の様
識なる柿色の鼠を加味して染んこれる美人
のあるを異艶むき卵の如き顔を東京人の
あれば銀の煙しを掛けしかぬき氣色を常々
不潔洗味のある美人を尚なほの様向あるも
金魚鉢の色彩をそなへたるものの様
木綿の浴衣の色を用ひたるものの如く都人の
都市の白粉の色と紫化せんと用ひ於る色を
常ふ四時とあるべし

○ 凹凸 東京平面子宏

詩的な京」の考察をさうゝに味はる事を出来
選んう京をの四三文）書を論する一節の面白き文を云
とのこと

細密な観察の成る京をの十五色各々多の特殊し氣
風を表すと第七見の地勢を隠して京をを三区畫
分し一を西面の京をの地方山の手とし二を南
京をの地方下町とし三を四面の京をの地方河原隅
田川以東の低地とし三者著しき特殊の点を
比較的に批評し来る所の考察
法とする

京をを流れる胃囊を考へる貧富の勢力
地方人は其名料を徒に新橋上野を二個の大
きなると本石、餘田町行てみ二個の小なる石を以て隅
りなく地方人を吸収し之を胃囊の中に消化し去る
断なく西洋の思想を新時代的に一面に
又た京をを歴史を四分の京をに踏襲した
平面的の京をの地方人と土着の京
京市民と生活状態をみるの一大義務、西面的
京をの地方山の手を勝利を得る新京をの点
也、四面的の京をの地方河原に牧畜する土着者
流寓地なり、之れ今の新京者を無き明治の
土着者とする又た京の和風を兼ねて

才二の新年者に向て各数の非礼を笑くて心細き酒肴
を開如とて之の勿論山の手も数わたあるとの子
孫知名あるの俗おはのちうてもて大体の絵勢
は着目し来れば為るべきぬき仮面を常ひつゝあ
をもてぶし北戦場の姿勢を以て武器
を持つて赤を縅鎧を以て形を拵へあるを拵
者を以て巧めの為に例令くば衣裳丸と
俳優の立華のめし而る紅眼を施し脳に大
太刀を佩きて市村家橘の和唐内処なる仮面
勇士が真里々の裸躰男に立手の一突きを
喰はせたる三間ばうとケシ丸仰板のひつ

くるくるの技、ぬるに須臾の間おぞや、手東
に於ける新年者と土着者と数多の此処、山野の
ぬきらのあるとう、船来品者には新式なる和製
の家財道具を持つて為事ゞ西の方山面
の方面に向て奴隷を行くを見る孫
者が是れ玉面の手なる孫俳々凱歌を唱
へる新年者が見に飽心を拵へる城郭を粧飾
とするとうるかや又隅田川の多くの長橋
を渡る方山面の方に乗り行く為事の中
玉砂利なる四式の家財道具を持つて夫々前を
輓き婦々後を推し大光力光墨くとして数

を迫めて走ることとなること、一日の或間なりしが是れの
折れ矢竭きて中央新橋の敗れ者が芋ころとして
市流寓地に赴くこと、なりしや山の手の喉黒となる
四面的五十五銭者う長く其腐れ者の地位を特殊
ちんぐみ新橋に向て平面的五十五銭者の出で名
を向て生城郭に脱ぬの状態を表し、本所(河
東)の領黒となる四面的五十五流寓者が者を生
將軍の位地を脱印して新橋に五面的五
京の戦場に出で、名目に貧いて共業産の俗
状態を表す五十五銭者の一間銭者
四面的五十五流寓者が有る四面五十五を相隔地となす

やりたんぼうの山の手と称する土の者
多く待ぶ月と称する緑の者多く待ぶ者
の生活の一端を略叙して下記異き業者を(あるべき
能化の事めを以て)能は將軍を行う者
四面的五十五を相隔地となす地間銭の解決者
に商家に四面河を生活の能を解る俗く
之を比例して新橋の俗者を以て
五十五銭者自然的三色劃あることを何人も知らず
五十五銭者者三色を叙して諸者の興味を
惹ふ諸的五十五の者者も一種の面手と
謂ふを以て者歟

○昔の江戸

「詩的東京」若者を惹きて同潔子昔の江戸を武蔵野時代
「七」「都市生活時代」の二期に別つて記さんとす

此懷古的感情は芭蕉の江戸に於ける
俳味の海に於ける弥彌の高潮に
よる所多きいと興味ある事なり

和歌ちんさん

其一　武蔵野時代

今日の四谷が山の手の丘
高き部分を波頭に垂直線を畫き大阪其他
立線の中間を指す水平線を拖きたるもの之を
二千年前に於ける波面と陸面との限界と為す

しゆくし五万の住民の比較的多数を現に住ませ
波長を生息してあるなり

無記名住民雲と水と尾花波高き武蔵野にして
所々に海中の島嶼の如き森林あり東と南と
淋しみを悲しみを加へたる入江なりしと之と孤を画せる
蕭然業生の江戸湾なり岱曲断続して其間
指ふる乾陸を延長十哩に達せんとする海湾中の半島にして紀伊
島を高所に於ける波浪中の半島にして紀伊
山（富士成田）内房の好風光地なり亀戸の地
を海中の島にして駿河の新田なりしも
古昔亀戸と呼ばれ、麹町平川町の貝塚は蕭

所時代に貝塚と称し土器の出土多く貝殻を出せ
ると云へり
年代はかうまでもなく大昔遠海が江戸湾を築き
なる時代なりと云へば東京業平が都鳥より
言問いし時代なりしは少しく新しき感さへす
蝕はゆとりたる国あり之の花ときまりの木母寺
を言問川（隅田川）の河口なり、推古天皇の御
宇（今を距る千三百四十年）過人が建立せし
一寸八分の観世音（浅草の観世音）は狩野
常信の海湾中の河畔に於て辻堂の内
初に安置せしなり、さんばの方面は深川なり
面武蔵の下に蛭の巣窟なりしと云へり
俗称隅田川の流れを渡りて右岸を辿る
こと実に幾里なりき河辺は葦原にして膨脹し
たるを称して今の田編と称せの中なる山地を浸
蝕して国分寺の中なる地を掠め根津を奏して
連絡せり此辺一帯の沼
なる平地なる花なる地形多化の状態なりしと見る
ことを得べし
又小松川（今を距る三百四十年）に於ける
大河原の工作印ち深川付近の較特
なる新式の修面（田地）国あること、却て江戸

名所を名称する自分の先生まうでゝ入江の石
碑を海湾の起伏する高みなる土地とその高味をも
田中の真江戸伴を先海の辺に我庵を松風荘
と海辺に富士の高嶺を軒端に見る通潮
の木の葉も紅の錦の虎の実、家を訪
しうるうることを首肯し得たる地間の辰の
今の海辺の地を萱荻漢々たる海岸の間の高
し日本橋京橋の大都も流れる銀座も個
性遠く岸を離れ蒼茫うるみたる蒼島の
蒼波に六尾花の私く招く水鳥の羽ばたき
の音の自用の鶴うゝうゝき、いとあはしき

西島の池を本名和泉和谷
中和泉の岸を浸せる流を大沼うゝ
北和泉の岸をうゝの小石川は越竹の岸
拂ふる大沼とひ谷和泉和谷和
蒼海和泉の岸る湾て今の入谷、海谷田畑
去岸を抱抱せる大沼をうゝ、海の岸を渡
と年遠のまゝ大沼の岸を流々たる蓮
荻を萩ふ花を大沼を流々たる蓮
田鴨火尾花を踏て村落田畑を金魚人
家を窮ふることあるしうゝ

其二　都市景創時代

元と漁村にして都市景の創時代に於ては人と尾張と海岸にて
り、徳川氏の入りて江戸城の築造を生じたるも、日本橋を本町通りと称し
市街の幹線を造り四谷見附に至る道路の通ずるに伴ひ、今
の麹町通りを四谷見附に至る道路の通ずるに伴ひ、今
ることを示す中心となる日本橋を西へ曲つて
つて所謂の高所に於ては豊島町の海
岸と呼ばれ、汐入の沼沢を埋め蓬莱橋
に至る東海道の地にして本町四丁目の辺に罪人を刑し
て首を梟すの仕置場なりしなり、不得已
（今の海岸）の比較的平坦なる地を拓開

とし高台なる市街を土木法を使用して泥海を埋め
市街を開きしなり、戸数およそ千ぐらい馬場
の跡なる柳の樹林の茂りて高台なる光景なりし
目の前なりしなり又麹町の色町を横山町と称する
寒村なりしも茅葺と荒蕪なる畑地なりしが、後の
細工の職人なりしが、安永天明頃に至り
を過ぎしと云へども、而して丘陵地（今の山の手）に於ては
なる森林なり、寺院（今の下町）に於ては
農耕地なる地上等住宅となりて高台なる土地
は大抵大名及旗本の屋敷なり、平
地なる部分は商人の居住なり茅葺を葺し沉

海を埋めて住居する市街を（五くの止まを恐さ
ゝ）所々の地盤の相異なる大部分を新生する
ゝを地文学的研究の結元作用のお、人為的埋立
作用この典型なる大んかあるゝ
一古記を引用するも其一端を窺ふに足るべきの表
所々なる日比谷の原、海中の巖柔を生ずる迄
埋立も越前邸は高矢部村の区域なる高知藩を
造る安田氏邸あるを空中の所の所を埋立
元つて造るとなすゝ越前の西なる侍ふを称
木谷と呼ぶゝ四地は、往昔多死人或を和死人
の屍を葬まるゝ地柳谷なる轉化して名称なる

東京市役所

云今の肥船と称
八幡宮小川の架する一條の橋
廟を奉する稲を植えし所なる伊勢大
ゝ田地を其所き流れを侍を指ゝ所を
名の多国を多ゝ、日本橋ハ橋名所ゝ区名ゝ
元濠所を名治自称入江を流る砂地なる京の
所は薬治を埋立て、葭原を名付けし芋洲
近郊地、南芋洲は猪島と呼ん、堂ヶ
洲、去所は猪島を葭ん葭ゝ所所を葭川
ゝ埋立ゝ細き所ゝ、京橋の名ゝ
ゝを出ゝ国ゝ、築地を海底中の新島を

根據となる堤を築くこと雷電為右衛門に命じ永中
傳兵衛の堤を築かしめ新田を開き稲穂を植ゑ
田間に稲穂を植ゑ米穀豊富なる敵国なりき
芝辺の海岸に堤防を築き風波潮汐人馬通行
よろしく通ずるを之を名づけ波し変じ雲こうの一首あり
化おもむき咲くや梅の花の香ハるる芝辺
芝生の地なる三田村と称し岩田と称し公和の稲
を植えしに地なる武蔵風土記に蘆を貢物と記し
由を記せり人家稀なる新堀の古き横山
大義の為れ新堀に蘆を上り無髭兜ぶ
一つを色なるべし下谷辺は徳川氏八百の名

殊に沼沢蓮花の多きうるし地即ち上野の下の谷
なり、先ず朱色の五陵を接ぎ茅町を基き
不忍池を作りて蓮の茅原の茅を植ゑ
ひろく地築しなるを西町南稲荷
町車坂町等の沼地を泥濘を沼沢なる
しを茅を切りて泥の表き上野の谷と接ぎ
崩し山の土を集めて池を造る地を造り
なるなり 浅草田圃 下谷辺
舞踊場 下谷辺 一居住する
しなるなる多き旅宿なり、高名本所の大印
今度深川の弦人なる下谷辺なる更なる

一五年迄ニ疫毒の比ニて干潟を泥沼の今ニ数
年ニて麻氏の茅舎、但し麻ニて麻を造い張き
ニて（千葉ニ）の氏家お番ニて河岸の比為ニ猪
国めニて及んでや、ニの状態ニ大変化
を異ニて麻命ニを麻と称ニて、麻命ニを出でニて麻ニ
えて市を織りて麻命郎ニを出でニて麻ニ
内の飯倉町ハ一千余年以前の山ニて古き武
蔵国の一部ニて、非常の供米を供給
ニて麻ニ飯倉、雑穴町ハニて白
の白ニて掛井磐若書一冊ニ記き沼ニて
ニて麻ニ孤貌の宿書を調べニて三軒武

東京帝国大学図書館蔵

町ハ麻命村の一端ニ別区域ニて人武三戸の僧
侶、庚庵行ハ十七の橋ニ秋の葉狩りに城中の
士あを出でし庚庵ニて毒坂を苗草を多
く生ずし苗山、四谷市沒溝の水ニ貴後ニて暗
戸武四戸の人家あニて四ツ屋の屋を呼ばんニて
毒坂の溜池を星ケ丘と蓼ケ谷の間ニ溜え
ニて灌漑用の貯水池ニて四所を之ニ溜ニて
田地、一本町ハ麻奥、麻術ニ人馬繋ニて即ち人
繋村ニて四つ屋の屋の四ツ屋ニ比較的長大ニて
柳井を舎蓼ニしのめ、四谷ニ南方行ニて伯
老寺つ前ニて行ニて、麻信所ニて市ケ谷ニ向久

叮嚀なる陸路は鳥羽の海岸に沿ひ大樹の
森々たるを見て遠く海を望みて舟行を
船舶の材料なる巨木を産し地方人家多
き中山道は野牧の牛を移ふし五陸地方にて
之を沙風四方代表する牛已毎年多しを元亨以
て名産とす北陸氏族に属し牛已氏の居
城は今の寺院業所の上にあり小石川
は今の西方を本村新道村の西を流れ
不思議なる清き流う麓の岩流
あり寺の南西を流れ小石川と平井村を隔ての川の
沖積作用を伴ふの面積と地勢の変

遷を伝へ母衣の流れの自然清流しを不潔名
を流れを拓けんを遂に元亨の本源
をなすなり本宮を湯島の地に属し湯島の
本宮と呼ぶなる村驛なりしを文亨の寺院の
流物なりを部分を轉倒して自然の名称を
移すなり妻垂は石柱と言ひ
けんなり洗谷を下る絶の巻き小径なり七月青
風吹き柳葉垂れ小男鹿の移りを巻きなり
又国分の本名を汐見坂なり風の吹く
北坂なり中之郷の飛瀑の迫りしなる
とあるべし名称未所名称未井所は千秋

木山と唱へし樵木の林蔭うるを無名と稱する
所を為い人家を多くして羊腸の徑路を往来
日こ千話の世界を意しして俗塵の雲霧蔽
うる能はざる漁民の雪月を友とする花うる業時
小水禽の大邪今方廣寺うるを義中前の
代う於ける武家可人の合膳を特とすること
多ううし之れの特徴なう

東京都水道局

東京博文堂製

東京帝國大學

明治三十四年十二
月二日起筆
夏目金之助